J. Brough: The Chinese Pseudo-Translation of Ārya-Śūra's Jātakamālā 紹介

水野弘元

ロンドン大學東洋アフリカ研究所教授ジョンブラフ博士による表題の論文「聖勇のジャータカマーラーの僞漢譯」は一九六四年度のAsia Major 誌(New Series Vol. XI, Part 1, pp. 27–53) に出て、すでに一年餘を經過しているが、まだわが國には詳しく紹介されていないし、また漢譯佛典に親しい日本の佛教學界にとつては青天の霹靂ともいうべきすばらしい論文であるから、たといおそくなつたとしても、これを紹介する必要と價値があると思われる。

結論から先にいうならば、宋の紹德、慧詢(一一一七六)等の譯出とされる菩薩本生鬘論十六卷(大正三・三三一c—三八五c)は聖勇のジャータカマーラーを譯したものであるとされていたが、この論文は、菩薩本生鬘論は梵本の飜譯というものではなく、梵本の誤譯、むしろ無意味な創作であり、全くの僞譯にすぎないことを徹底的に論證している。

漢譯佛典の中には、飜譯者の力量不足のために飜譯の體裁をなさなかつたり、校正が十分でなかつたために、譯出後まもなく失われてしまつたものもかなりあるであろう。例えば齊時代に廣州において沙門大乘によつて譯出されたとされる五百本生經や他毘利(宿德律)(出三藏記集二、大正五五・一三b)はパーリ佛教の本生經と律藏ではないかと思われるが、譯出場所が遠隔の地であるという以外に、その飜譯が不完全であつたために、傳わらなかつたものと思われる。また義淨三藏による根本有部律の譯出も、かれが校正し得た分は殘されたが、校正できなかつた犍度の一部分は永久に失われてしまつた(開元釋教錄九、大正五五・五六九a)。

また飜譯の際、または傳承の間に、譯文が省略されたり增廣されたり改變されたりした漢譯經典は極めて多いであろう。增廣改變の著しい例としては、例えば盂蘭盆經、報恩奉盆經があり、羅什譯の大智度論は譯者の手がかなり加えられているであろうといわれ、また羅什譯の法華經方便品の十如是なども羅什の改變によるものであろうといわれる。また竺法護譯の普曜經はその原本とされる現存のLalitavistaraとはかなり相違している。それは普曜經の原本となつたものが現存梵本と違つていたためでもあろうが、すでに存在していた吳の支謙譯の太子瑞應本起經から採用した部分もかなりあるようである。このような例は漢譯佛典の中に少くないであろう。

また梵本原典が全然なかつたのに、中國で創作された僞經なるものも、各時代を通じて數多く現われ、それが極めて重要な典籍となつている例は周知のように少くない。

右に掲げた諸例はいずれも佛教をよりよく表現し、正しく理解させ、その時代の民衆にもつとも適したものにしようとした善意の護法精神から發したものであると思われる。

ところが菩薩本生鬘論のように、梵本に名を藉りながら、原本とはほとんど關係のないしかも佛教にとつて全く價値のないものを僞作した例は、多くの漢譯佛典の中に、他には

あまりないのではないかと思われる。

ただ本書の譯出者の一人である紹德等が譯出したものに大乘隨轉宣說諸法經三卷（大正一五・七七四a以下）がある。本經は羅什譯、諸法無行經三卷（大正一五・七五〇a以下）、隋の闍那崛多譯、佛說諸法本無經三卷（大正一五・七六一b以下）と同類の經典である。その原本は現存しないが、梵名は Sarvadharmāpravṛttinirdeśa であつたことが Śikṣāsamuccaya (p. 6 16; p. 90 19; p. 99 13,16) から知られる。すぐれた飜譯者であつた羅什や闍那崛多はこれを正しく諸法無行とか諸法本無とか譯しているのに、宋譯の隨轉宣說諸法はこれを梵語に還元すれば °dharmânuprav-ṛtti° となるから、これは題名を正しく譯したものではない。そしてこのような誤譯は菩薩本生鬘論における誤譯、濫譯に通ずるものである。

さらにこの大乘隨轉宣說諸法經は、それだけについて見れば、決して不明瞭、不都合な個所はなく、立派な譯本のようである。しかしこれを前の二譯と比較するに、卷首の偈について見れば、前の二譯は大體一致しているのに、宋譯は全くこれと異なつている。また會座の衆の人數にしても前二譯は一致しているのに、宋譯は全く違つたものとなつている。これを菩薩本生鬘論の飜譯態度から推せば、兩者はおそらく同じ方法によるものであつて、この宋譯大乘隨轉宣說諸法經も原典の內容と全く違つた創作僞譯にすぎないかも知れない。

さて本題の紹介に移るに、ブラフ教授によれば、西洋の多くの學者は南條目錄（一八八三）における菩薩本生鬘論の解說に從つて、その十六卷中、最初の四卷は梵文三十四話中の十四話を譯したものであり、後の十二卷は本生經の註釋的なものであるとしていた。他方ロシアの Ivanovski は漢文をロシア語に譯し（一八九三）、それが十年後にフランス語に譯され（Revue de l'histoire des religions xlvii 1903, 298-335）若し Paul Pelliot はその紹介批評をなした（BEFEO, IV 1904, 752-5）が、それらはあまり學界の注意を引かなかつた。彼等は漢譯が現梵本と違つたものから譯されたとか、後の十二卷は別の原本から譯されたとか論じた。

また日本の望月大辭典や、漢文を日本譯した岡教邃氏の解題（國譯一切經、本緣部五、二五九頁a以下）などにおいても、ペリオ等と同じく、後の十二卷は現梵本と違つた原本から譯されたようであり、これは本生經の註釋的な論書であり、しかも意味不明瞭の拙譯であり、不完全な斷片であるとしていた。

これに對して、教授は漢譯本を精查することによつて、これらの學者の說が誤つていることを發見した。まず最初の四卷について見るに、岡氏によれば、十四話の中で最初の八話は梵文に對應するが、第九話以後は現梵本と對應しないから他の資料から譯したものであろうとしているが、これについても教授は後の十二卷の部分と同じく、すべてが現在梵本と同じ形式の原本によつているとしている。

そして教授によれば、最初の四卷と後の十二卷とはそれぞれ別の譯者の譯に成るものであつて、最初の四卷十四話の譯者は梵語をほとんど解しなかつたために、原本の物語の題名から、それに類似の物語を既存の漢譯佛典の中から拔萃し、これに多少の改變を加えて、そのまま揭載したものであつて、これは飜譯といわるべきものではなく、剽竊にすぎない。

試みに最初の八話の題名を、梵文と漢譯との兩者について列擧するならば

1. Vyāghrī-jātaka　投身飼虎緣起
2. Śivi-j.　尸毘王救鴿命緣起
3. Kulmāṣapiṇḍī-j.　如來分衞緣起
4. Śreṣṭhi-j.　最勝神化緣起
5. Aviṣahya-j.　如來不爲毒所害緣起
6. Śaśa-j.　兎王捨身供養梵志緣起
7. Agastya-j.　慈心龍王消伏怨害緣起
8. Maitribala-j. 慈力王刺身血施五夜叉緣起

となる。

第一話は梵文の vyāghrī 虎の語から、投身飼虎緣起を採用している。これは内容的には梵文と全く異なつたものであつて、決して梵文からの譯ではない。この點はすでにIvanovski が指摘している通りである。そしてこれは第二話以後においても同様である。

第二話は Śivi の語から、梵文と内容の違う尸毘王物語が採用され、第三話は piṇḍī の語から分衞 piṇḍapāta が連想されて、全然別個の物語が取られている。第四話は śreṣṭhi 長者の語が誤つて śreṣṭha 最勝とされ、最勝神化の物語が採用されている。第五話は Aviṣahya という固有名詞が a-viṣa-ha 不毒害と見られて、如來不爲毒所害とされ、そこに別個の物語が採用されている。

第六話は śaśa から兎王の物語を持ち來り、第七話の漢譯の題名、慈心龍王消伏怨害は梵文題名からではなく、第七話の結語の直後にある第八話の序文の中に maitramanā maitrabalo nama rājā babhūva「〔菩薩は〕慈心ある慈力という王であつた」とある文を誤解し、maitramana 慈心 nāga (nāma の誤) rāja 龍王としたものであろうと教授はいつているが、確かにその通りであろう。第八話は題名の Maitribala 慈力から來ているが、これも原文とは全く異なつた内容のものである。

それでは漢譯者はそれらの物語をどこから持ち來つたのであろうか。教授は漢譯佛典中の物語を探索して、第一話は金光明最勝王經卷一〇（大正一六・四五〇c以下）にある物語を多少改變して採用したものであるとし、この兩文を擧げて、兩者がいかに類似しているか、そして第一話は決して獨立の飜譯ではなく、最勝王經のものを依用したものであることを論證している。これは一見して明らかなことであつて、否定し得られない事實である。

同様に第二話は賢愚經第一話（大正四・三五一c以下）の中から採用したものであり、第三話も賢愚經第七話（大正四・三五六a以下）から、第四話も賢愚經第一四話（大正四・三六〇c以下）から、第六話は菩薩本緣經第六話（大正三・六四c以下）から、第七話も菩薩本緣經第八話（大正三・六八b以下）から、第八話は賢愚經第一三話（大正四・三六〇b以下）から、第九話も賢愚經第五話（大正四・三五四b以下）から、また第一四話も賢愚經第二三話（大正四・三七六b以下）から採用したものであり、その他の説話も同様に漢譯佛典のどこかの物語から採用したものであろうとしている。

實際において、筆者が少し調べた點から見ても、例えば第一一話は大方便佛報恩經卷七（大正三・一六二a以下）から依用したものであり、第五話は多少相違した文であるが、例えば申日兒本經（大正一四・八一九b以下）とかなり類似している。もつとも本經は第五話とは別個の飜譯に屬するものであるから、前の諸話のように同じ飜譯の物語が漢譯佛典の中に別に存在するに相違ない。相當經の發見されない第一〇、第一二、第一三の三話も、かならずどこかにその資料が存在するであろう。

なお第三、第六、第七、第八、第一一の五話については、干潟博士の「本生經類の思想

史的研究付篇」菩薩本生鬘論の項（九一頁以下）に參照として指摘されているが、それが同一飜譯の物語であることは氣付かれていない。このような剽窃のことはわれわれが夢想もしていなかつたことであつて、この發見はブラフ教授の大きな功績であるとともに、東洋の學者を顔色なからしめている。

右に見たように、十四話中の最初の八話までは、その題名から見るかぎり、梵本と多少の連絡をもつているから、岡氏等はこれを梵本からの譯出とし、第九話以下の五話は他の資料から譯出されたであろうとしているが、これも前の場合と同樣に他の漢譯佛典から物語を採用したものであることが知られる。そして教授によれば、第九話は梵本では Viśvantara-jātakaとあり、漢文ではその題名が開示少施正因功能緣起となつているが、それは梵文第九話の序文（六二頁二行以下）にある prakṛtibhiḥ prakāśyamāna-daṇḍanītiśobhaḥ samyakpravṛtta-vārttā-vidhiḥ の文から取つたものらしく、開示は prakāśati、正因は samyak-pravṛtta、または因は prakṛti を譯したものであろうとされる。

第五卷以後の十二卷は、前の四卷とは全く違つた形式のものであり、それ故に從來論的な註釋書であろうと考えられたのであるが、教授によれば、この部分も前の部分と同じく、現存の形の梵文から譯されたものであろうとされる。ただ前の部分が梵語に無知の者が譯したのに對して、後の部分は梵語の單語を多少知つてはいるが、文章の讀解力は全くない者によつて譯されたものと思われる。これが梵文に依存していることは、この部分は第一一話の殘部以下第三四話の最後にいたる二十四話に關するものであるが、ここには物語が出ていないことはいうまでもない。それは譯者の僅かの單語の知識によつて、不完全な譯をところどころに置き、その他は創作によつて全くわけのわからないことを書き綴つているにすぎないからである。この意味で、この部分は一貫した内容をもたないナンセンスの駄文にしかすぎない。

しかし各話の最後に物語の番號だけは梵文によつて揭げているので、物語間の區切りは明瞭である。その番號の所には、最初の第一一話では、菩薩施行莊嚴尊者護國本生義邊十一とある。この題名はすべての物語について大體同じ語で用いられている。教授によれば、この題名は各話の最後にあつたであろうと考えられる bodhisattvāvadānamālayāṁ「菩薩譬喩鬘における」〔第一一〕という原語を、漢譯者は bodhisattva-dānamālayāṁ と解して「菩薩施行莊嚴邊」となし、「尊者護國本生義」は創作付加したものであろう。

第一二話では菩薩布施莊嚴尊者護國往梵天生本生義邊とあつて、他の場合よりも「往梵天生」の四字が多いが、これはこの第一二話の題が brāhmaṇa-jātaka であるために、brāhmaṇa の語を誤つて往梵天生と譯したものであろうとしている。

さらに各話の最初の方に、漢譯にはかならず「所謂隨順聽聞」の句があるが、これは梵文の tadyathānuśrūyate「それは隨順聽聞されるが如し」を正しく譯したものであり、また各話の最後の方に「彼天」の語がよく見られるが、これは梵文で tad-evaṁ とあるのを誤つて ta-devaṁ と解したためであるとしている。

また漢文の各話の最初の文と梵文とを比較するに、例えば第一三話では漢文に、彼若纏縛煩惱眞實修出世道自在有力とあるのは、梵文に tīvraduḥkhāturāṇām api satāṁ nīcamārga-niṣpraṇayatā bhavati svadhairyāṁ vaṣṭambhāt「自己の勇氣が確立しているか

ら、善き人々はたとい苦難にさいなまれても、卑しい道に行くことをしないのである」とある文の duḥkha が煩惱、satāṁ が眞實、mārga が道、svadhairya が自在（これは aiśvarya と誤つたもの）、tīvra は tejiva と見て「彼若」としたものであろう。

このように各話の最初の文句は兩者を跡付けることができる。その一々の例はここに掲げないが、さらに著しい例として教授は第二五話の最初の數行を梵文（Kern p. 162 10-15）と漢文（大正三・三六四b二〇—二六行）との兩者を掲げて、その對應の實例を示している。これは見事な解釋である。

なお教授によれば、漢文で毒とある所の原文は viṣama, viṣāda（三回）, dviṣaḥ, bhaviṣyanti, viṣaya（二回）などであつて、viṣa の形が含まれておれば、それにすべて毒の譯を付している。また arhati（三回）とか yathārhaṁ（二回）とかの語には「如阿羅漢」とし、gārhasthyaṁ 在家の語にすら、その形の類似の故に「阿羅漢」を當てるという出鱈目をしている。このような例は枚擧にいとまがない程である。

以上によつて後の十二卷の部分も梵文を依用したことが知られる。なお卷首に梵文には序として四偈があるが、漢文では五字四句を一偈として數えれば三十偈が掲げられている。これも教授によれば、漢文は梵文の序偈だけでなく、第一話の前半に近い第九偈あたりまでのものを譯したものであろうとされるが、これも例の如く出鱈目であつて、飜譯というものではない。

要するに漢譯者は梵才大師の稱號を得ているが、事實は全くの不梵才である。ブラフ教授は漢文の自由な日本人が菩薩本生鬘論の僞譯を發見できなかつたのは、自由に讀めるために却つて梵漢を着實に比較しなかつたためであり、自分は漢文が得意でないためにゆつくり兩者を比較することによつて、兩者の差違や關係を發見したのであると謙遜しているが、われわれとしてはこのような僞譯經典が漢譯佛典中にあることを考えてもいないために、深く研究することもなく、見逃していたものであろう。

周知のように、教授は今までに多くの論文や著作を發表し、その多くが前人未說の新しい分野を開拓したものであつて、それは何事もゆるがせにしない徹底した研究によるものであろう。この點は日本の學者も深く反省し見習うべきことであると思われる。

新刊紹介（九）

Melanges Chinois et Bouddhiques O. Janse, Archaeological Research in Indochina, Vol. III (1958)

INSTITUT BELGE des HAUTES ETUDES CHINOISES

Musées Royaux d'Art et d'Histoire

10 Parc du Cinquantenaire

BRUXELLES 4 (Belgique)